

【第 16 回博報教育フォーラム 登壇者ご紹介】

今回ご登壇いただく3団体様の簡単なご紹介です。

ともに、第 49 回博報賞、文部科学大臣賞を受賞されています。

◆群馬県 伊勢崎市教育研究所 日本語教育研究班

日本語指導担当の教員 6 名が平成 24 年に立ち上げた、自主研究班。「日常会話の力」と「学習活動に参加するための力」に分け、日本語の力を見取る「ものさし」やツール、プログラムを開発。日本語指導を標準化し、一人一人の段階に応じた指導を可能にしている。

<先生方の願い>

「日本語を教える」のではなく、子どもたちが“わかる・できる”を実感できる場面を沢山つくりたい」

「“わかる・できる”を実感し、自己有用感や自信をもって、在席学級でイキイキと活躍できる子どもに育てほしい。そして、将来の夢や希望につなげてほしい」

「子どもたち通して、真の意味での国際文化理解が学校全体に広がっている。他校でも学校全体で取組んでもらえたら嬉しい」

◆岐阜県 岐阜市立明郷小学校 言語障がい通級指導教室(ことばの教室)吃音の会

異動がある公立小学校の教員による主催ながら、吃音のある児童への教育支援を15年以上継続している取組み。特にグループ指導の取組みは貴重。「吃音の会」は、年に3回開催されており、児童対象の「児童の活動」と保護者対象の「親の会」から成る。毎回15組程度が参加するグループ指導は全国でも類を見ない。会を通じて吃音の正しい知識と付き合い方を学び、吃音と向き合う心を育てている。

<先生方の願い>

「少数派である吃音の仲間(吃音の子どもをもつ親の仲間)と出会う機会をつくりたい。同じ悩みを共有し、気持ちを吐露できる場をつくり、子どもたちや保護者の不安を解消したい」

「“吃音を直す”のではなく、“つままることは悪いことではない。つまってもいいから、自分の話したいことを話そう”と思える自信をもてるようにしたい」

◆福島県 富岡町立富岡第一中学校・第二中学校 三春校

双葉郡富岡町にあった2つの中学校は、原発事故で町全域が避難指示区域に指定されたことにより、授業ができなくなった(現在は、富岡校として再開)。そこで、2011年に避難先の学校として福島県田村郡三春町にある工場の社屋を利用して開校したのが、富岡一中・二中 三春校だ。富岡町から約50キロ離れた場所に位置しており、児童数は10名。2021年度をもって閉校となる。震災当時5,6歳だった子どもたちが「ふるさと創造学」の取組みを通じ、富岡町への誇りや人と人とのつながりを育てている。「ふるさと創造学」は「知る」「広げる・深める」「つなぐ」という段階的なカリキュラムであり、地域の未来を担う人材を育成し、地方創生に向けチャレンジする自治体や学校のモデルとなる実践である。

<先生方の願い>

「子どもたちにとっては、“ふるさと”も母校“もなくなってしまうが、なくなるからこそ足跡を残したい。想いをつなぎたい」

「人と人とのつながりの中で、記憶もつなぎ、自らが『ふるさと』や『文化』を創造し発信する子どもに育ててもらえたら」